

シンポジウム 1
6月7日(土) 15:00-17:30

メディア研究についてのインターネット史
メディア化する政治を事例として

問題提起者:津山恵子(フリージャーナリスト)

問題提起者:伊藤昌亮(成蹊大学)

討論者:喜多千草(京都大学)

討論者:烏谷昌幸(慶應義塾大学)

司会者:山口仁(日本大学)、別府三奈子(法政大学)

(企画:企画委員会、理論研究部会)

インターネットが社会的に普及し始めて、すでに四半世紀が経過した。当初、未来社会論や情報社会論の文脈で語られていたインターネット論も今日では現代社会論としての色彩が強くなってきている。インターネット空間の秩序に対する評価も、かつてはその自由度（もしくは「無法地帯」）に期待する面が多々あったが、近年では経済的にも法制度的にも「秩序」化が徐々に進行し、またインターネット上で生じる様々な問題に直面して統制を求める声も強くなりつつある。

こうした変容を前にして、もはや「マス・メディアに変わるメディア」「マス・コミュニケーションに代わる新しいコミュニケーション」として、インターネットやそこで行われるコミュニケーションを論じているだけでは不十分である。インターネット普及後数十年の歴史の中で生じた変容や変動を踏まえて現在のメディア環境を論じる必要があるだろう。

例えば 2024 年春大会シンポジウムでは「プラットフォーム資本主義」の問題を取り上げて議論してきた。これもプラットフォーム企業台頭後に生じたインターネット社会の「変容」をインターネット空間の再編制の一事例として扱うものだったと企画委員会では位置づけている。

学会名称が「日本マス・コミュニケーション学会」から「日本メディア学会」となっており、3 年、現在のメディア環境をマス・メディア（マス・コミュニケーション）との対比以外で議論する必要性、インターネットもすでに歴史をもつものとしてその「変容」について語る段階になっていることを前提とした議論を提起していきたい。

今回は具体的なテーマとして特に昨年来、再び注目されることになってきた「政治とメディア」の問題を取り上げたい。前世紀のメディア研究では肯定的に期待されがちだった「マス・メディアを疑う」「能動的なオーディエンス」「意見を表明して実際にアクションを起こす」といったものが今、インターネット政治の問題の一因となっているのではないかと。かつての「期待」が「失望」となった現在、メディア研究にはどのような視点が求められるのか。

シンポジウム2
6月8日(日) 15:15-17:45

「障害」をめぐるメディア研究の展開

話題提供者: 樋口麻里(北海道大学)

話題提供者: 埴幸枝(成城大学)

話題提供者: 柴田邦臣(駒沢大学)

討論者: 田中瑛(実践女子大学)

討論者: 美馬達哉(立命館大学)

司会者: 飯田豊(立命館大学)、藤嶋陽子(立命館大学)

(企画: 立命館大学)

近年、日本メディア学会では「障害とメディア」をテーマとしたシンポジウムやワークショップ、報告の存在感が徐々に増し、成果を生み出している。しかし、国外における「障害メディア研究」の進展と比較すると、学会全体としての取り組みはまだ十分とは言いがたい。このような現状を踏まえ、本シンポジウムは「障害」をめぐる多様な論点を結集し、この領域の研究を深化させるとともに、メディア研究そのものが内包する暗黙の了解や理論的限界を明らかにすることを目的として企画された。

障害メディア研究が取り上げるテーマは多岐にわたる。たとえば、メディアにおける障害者表象のあり方は、障害に対する社会意識の形成に深く関わっているとされ、多くの分析が行われてきた。その際には、障害者の経験を描き出すことでもたらされる映像表現や感覚も射程に含まれている。あるいは、障害者がメディアを利用する際に直面する課題も、技術デザインに埋め込まれた社会構造の偏りの観点から考察されてきた。この課題に取り組むことは、メディア技術そのものの設計思想をより包摂的なものへと変革する可能性を秘めている。

上記にとどまらず、障害メディア研究は広範な成果を生み出し、独自の領域を形成しつつある。しかしこのことをもって、「〇〇を対象とするメディア研究」という形で囲い込み、分離するべきではないだろう。障害メディア研究が提起する論点は、従来のメディア研究が前提としてきた理論や概念を再考する契機となり得るからである。

障害メディア研究は、従来のメディア研究が特定の身体観やオーディエンス/ユーザー観を暗黙の前提とし、それに基づいて理論構築や歴史記述を行ってきたことを批判的に問い直す。たとえば、健常者の身体を想定した上でメディアを身体拡張のプロセスとして捉えたり、その視覚や聴覚を中心に据えたりするアプローチの前提には、健常者を「標準」とし、それ以外を「例外」として扱う価値観が反映され、それを作り出している。こうした批判的観点は、特定の身体や経験を基準とした理論構築や歴史記述を見直し、メディア研究そのものの可能性を再構成する上で重要である。

以上を踏まえ本シンポジウムでは、「障害とメディア」をめぐる学問的探究を深化させ

るとともに、様々なバックグラウンドを持つ参加者との議論を通じて、「メディア研究」の今後のあり方についても展望したい。

なお、本シンポジウムでは、情報保障のため文字通訳を実施いたします。

